

肝胆膵疾患センター開設

やまなし

医療最前線

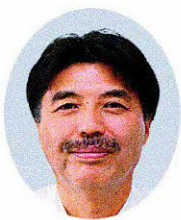
県立中央病院から

《 126 》

県立中央病院は4月、

肝胆膵疾患センターを開設した。内科と外科が密に連携することで、肝臓、胆道、すい臓のがんに対して治療方針をすぐに検討し、できるだけ早く治療できる体制を整備。本年度から肝臓外科の専門医が着任し、原発性肝がんや転移性肝がんの手術、近年増えているウイルス性ではない肝がんの治療にも力を入れていく。

同センター長の飯室勇

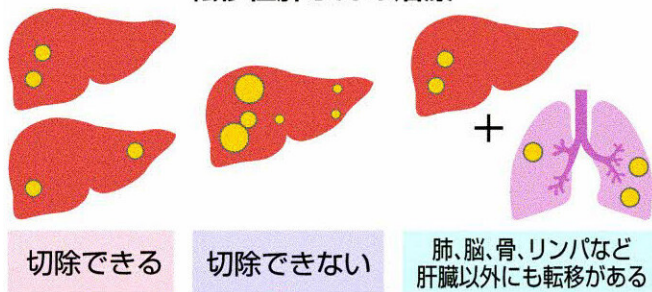


飯室 勇二

肝胆膵疾患センター長

手術や治療 幅広く対応

転移性肝がんの治療



※化学療法が効くことで切除可能となる場合がある

二医師によると、肝がんには肝細胞がん、胆管細胞がんのほか、大腸がんや直腸がんが肝臓に転移した転移性肝がんがある。転移性肝がんの治療は化学療法が一般的だが、大腸・直腸がんは比較的悪性度が低く、肝切除することで再発しない人もいるという。「切除

術を数多く行ってきた。転移性肝がんでは、数や大きさ、悪性度によって

できるものは切除した方が、化学療法単独に比べはるかに生存率が上がる」として、積極的に手術を行う考えだ。

飯室医師は兵庫医科大学肝胆膵外科教授を務め、4月に同病院に赴任。日本内視鏡外科学会の技術認定医でもあり、肝がんに対する腹腔鏡下肝切除

切除できないケースもあるが、手術前に化学療法でがんを小さくすることで手術対象が広がるといふ。飯室医師は「これまで手術は難しいと思われた症例でも相談してほしい」と話し、地域病院などからも積極的に患者を受け入れたいとしている。

また10年ほど前から、B型・C型肝炎が原因ではなく、「NASHL(ナツシユ、非アルコール性脂肪性肝炎)」などからがん化する「非ウイルス性肝細胞がん」が増えている。NASHLは脂肪肝や糖尿病の人に多い傾向だが、自覚症状がな

く見つかりにくいという。飯室医師は「がんが大きくなって初めて気付く人もいる。できるだけ早くNASHL由来の肝がんを見つけて治療していきたい」と話している。
Ⅱ第2、4木曜日に掲載します